奈津実の告白

作=奈津実

[пп. . . .]

と彼は真っ赤になって、股間を指差すの。わざとためらって見せてから、

1

彼の部屋でお酒を飲んでいた時のこと。 半年ほど前だったかな・・・。

「奈津実、言いにくいんだけどぉ」

「なあに?」

「俺蹴られたいんだよなー」 なんとも恥ずかしそうに彼が、言い出したの。

私にはピンと来るものがあったけど、一応、

「え~?意味が良くわかんないよー」

とはぐらかした。

「いいけどー、 ヤバクナイ? それって」

と私。

「大丈夫だから・・・一回やられて見たかったんだ。 ねえ、軽蔑しない?俺って変?」

なんて可愛いんでしょう!

「さとしが喜ぶなら・・でも逆に私のこと嫌いにならない?」

本当は「待ってました!」と喉を鳴らさんばかりの私だけれど・・

ちょっと困った素振りでプレイをスタートしたの。

V 彼いっつもピチピチのジーンズでアソコ、 モッコリさせているし、 な~んとなく、 そ~んな句

がしてたんだけど。

実は彼が居ない時にビデオ見つけちゃったの。

外国の女子レスラーが男レスラーの急所蹴ってるシーンばっかり編集してある奴

何度も、苦しそうな男のレスラーの悶絶シーンが繰り返される

・・気づいたら、 私、 濡れてい た・・・。

で、この前、 彼と告白ごっこをしてる時、私はカマをかけてみた。

小学校の頃、 私が男の子の急所を蹴って泣かしたことを、 さりげなく話してみたの。

やっぱり・・

彼は薄いクリーム色のビキニの水着に、 はき替えた。

淡い色のビキニが、アソコを大きく感じさせる。

女だって本当は見たいの・・・男の人のカタチを・・

彼は両手で私を捕まえようとした、その瞬間、 私は彼の腰に両手をあてて、 下からアソコを膝

で蹴り上げた。

ズボッと鈍い音がして、

「うつ!!」

と声にならない声。

軟らかな彼のあそこの感触が直に膝に伝わって来て、 私は興奮を抑え切れなくなったの。

股間を両手で押さえてうずくまった彼の苦しげな吐息が私の脚にかかる。

みを爪先で蹴り上げた。 私は後ろに回って「大丈夫?」といいながら、 今度はお尻の間から垂れ下がった柔らかな膨ら

「うぎや!!!!」

今度は横向きになって脚をバタバタさせながら苦しむ彼

「ねえ!さとし!本当に大丈夫?」

「あ・・ああ・・・・くつ・・・」

あははっ! 本当に痛そう。

好きなんだ。私。男の人の痛がってる格好って。

惨めで、可愛くって、愛とおしくって。

彼の手を払い除けて、脚を開かせて思いっきり膝を落とした。

「あうっ!!」

まともに入った!!

海老のように丸まって咳き込む彼の

かなり効いたみたい。 彼、 右手で急所を、 左手でおへその下あたりを押さえて悶絶してる。

何という恍惚感。

強いはずの男の人が、あんな小さなタマタマを押さえて苦しみもだえる。

我慢のしようが無い痛みに耐えている顔。感じちゃうョオ・・。

私は後ろから水着に手をかけて、ちぎれんばかりに引っ張った。

お尻に食い込んでTバック状になっている。 でも・・・隠すことのできない膨らみがお尻の間

から「蹴って下さい」って言ってる。

四つんばいになった後ろからソフトボールのピッチャーよろしくパンチを叩き込む。 ぴっち

- 6 -

固定されたタマタマに拳がめり込む感触。

パウーン!! といい音がして彼がまた崩れ落ちた。

「ぎゃああああ!ギブアップ!!奈津実!待って!!!」

ぐったり動けなくなった彼が目の前に横たわっている。 すっかり本性をむき出しにしてしまった

私。

「大丈夫?」

「多分・・・ねぇ奈津実・・・また今度やってくれる?」

「いいよ!」

その日から私たちのプロレス遊びが始まったの。

水着を着て、股間に「みかん」を入れてバスタブにまたがるの。

感触に酔いしれ、「次はどんな風にアソコ叩いてやろうかな」って・・・ 体重をかけ、 女の私には分からない痛みを想像しながら、 私の股間で潰れて行く「みかん」

彼の悶絶姿を想像している私だった。

9

それは小学校6年の頃にさかのぼる。

持ちに襲われた。男の人のアソコの図解を見ながらいろんな言葉が私の中に入ってきたの。 をいろいろと読んだりした。生殖器のページを見ながら、はじめて、 生理の始まった私は、 自分の体の変化にショックを受けながらも、 自分で説明できない変な気 両親の居ない時に医学辞典

・オルガズム、男性の最大の急所、 失神することもある、睾丸、精巣・・・

じっていたの。 気がついたら、 テレビとかで見たことのある悶絶シーンを思い出しながら自分の大事な所をい

数週間後、 私は決心した。 いつも私をからかっていた男の子に試してみようと。

えてもいなかったであろうケン君のがら空きの急所へ私の膝がめり込んだ。 相変わらずのワンパターンで私の胸を触りに来たケン君の股間を膝で蹴り上げた。 まさか、 考

「きゃ!」

苦痛に歪んだケン君の顔。しきりに股間やおへそのあたりを押さえたりさすったりする手の動き。 初めて知る、興奮に私は震えたの。 つきだした震えるお尻と、お尻の間から見える急所を押さえる指先。全てが私の中に入ってきて、 女の子みたいな声を出してケン君は股間を押さえ、内股になるとドスンと後ろに尻餅をついた。

なわないのに。 「男性の最大の急所」・・こんなにも簡単に男の子を倒せるなんて。力で押しあったらとてもか

興奮した私は倒れているケン君の股間めがけて立て続けに蹴りを入れた。

「ゴメンよ、もうしないから許して!」

ケン君は泣いていた。

をこらえて急所を押さえる姿を想像すると私のお腹の中が熱~くなって、 不思議だった。なんで女と男はこんなにも違うんだろう。男にしか分からない痛み。 胸がドキドキした。 その痛み

その日から私の中で「金蹴り奈津実」が一人歩きをはじめたの。

4

私には2つ違いの弟が居て、弟とは結構仲も良かった。 高校生の頃、共稼ぎだった両親は帰りが遅かった。洗濯と食事の支度は私の仕事の一つだった。

ある日、 洗濯している時にふと、弟のビキニに目が止まった。

光ったようなシミ・・・

これってもしかして・・・。

(今もそうなんだけど) 好奇心の固まりの私はチャンスをうかがった。

・多分今だ! 女の感は鋭い んだゾ

恐いもの見たさで、 そっと襖の隙間から弟の部屋を覗いてみた。

そこに私の知らないオトコになった弟を見てしまったの。

ドキドキした。喉が渇いて頭がクラクラする。 背中を向けているけれど、右手は間違いなく股間へと伸び、 せわしなく動いている。

やめろ!奈津実!

もう一人の自分の声が聞こえた様な気がしたが、 誘惑には勝てなかった。

「ねえ克実!」

ノックすると同時に襖を思い切り開けた。

「あ!だめだよ!」

慌てて両手で股間を押さえたが頂点に達した弟はどうにもならなかったみたい。

「あーら! ごめ~ん!」

と私。

からかうだけのつもりだったのに、克実の左手に握られたピンクのちっちゃな布を見て私は一

瞬ひいた。

私の勝負パンツ!!!!

つかつかと歩み寄ると弟から取り上げた。

驚いた弟は持っていたパンツごと慌てて股間を押さえたため、白いものがべっとり付いている。

サイテー!」

「お姉ちゃん・・・・ ゴメン!ごめんなさい!!」

ての時、悪魔の様な考えが私を貫いた。

「ママに言っちゃうぞ」

「やめてよ・・・なんでも言うこときくからさー! お願い!!」

「とりあえず自分のパンツ履いたら?」

•

「言うこと聞く?」

「・・・仕方ねーもん・・いいよ」

「じゃ、実験台になってくれる」

「何の?」

「痴漢に襲われた時の護身術。最近物騒だからさ~」

「なーんだ!そんなんならいつでもいいよ!」

こいつ何も分かってないな~。

悪魔のような私は早速″練習″を始めた。

弟に抱き着かせておいて私は容赦なく急所をひざで蹴り上げた。

だって大股開いて抱き着いてるんだモン!

コリッとした感触がひざに伝わってくる。

「ああ! くっくくく!!」

弟は大事な所を押さえて、くの字になった。

やっぱり一緒だ。どんなオトコも痛いんだ。 あんな程度の蹴りで・・・内股になっちゃって・

•

「ちょっと・・・・ねーチャン・・・ここは・・・」

「うっそォー!手加減したよー」

しばらく待ってあげたけど、 かなり苦しそうで急所から手が離せないらしい。やっと体を立て

直すと、また股間を押さえようと手が伸びる。この瞬間が可愛い!

「ねぇ! ちょっと! まだ 1 発しか入ってないんですけどぉ~」

「そ・・・そんな」

「どれどれ、見せてごらん」

私は弟の手を払いのけると股間にビンタを食らわせた。 パチー といい音がして、 弟はま

た海老のように丸くなった。

「くっつくく・・・ひでーよ!」

「あーら、ひどいのはどっちかしら?」

・・・・なんてひどい女なんだろう・・・。

も、やめられないの。ごめんね。

「ねぇ、どんな風に痛いの?」

「うううっ・・キーンって来てジンジンして、ズキンズキン」

い″男の急所 ҝに私は憧れさえ感じてしまう。 私は思わず〃 ぷっ *と噴出してしまった。私程度の腕力で、 うずくまって動けなくなるほど痛

「これなら痴漢倒せるかな?」

「あったり前じゃん! 急所やられて我慢できる男なんていない

と言いながら、まだ右手は股間を押さえてる。

「そっか」

我慢できる男なんていない・・・痛いのね・・そんなに・・・。

私は動きの極端に鈍くなった弟の両足を持って2発連続で急所を蹴りつけた。

「やめて!うぐっ!」

弟の額に脂汗が浮いている。 きっと限界を超えるほどの痛みなのだろう。

めんね。 私の体の何処を探しても、 あんなに大袈裟に痛がる所は無いもの。やっぱ り 分からない

そのまま両足を持って、 電気アンマをかけた。 やってみたかったんだ。 えへ へへへつ

のを足の裏に感じていた。 さっき達したばかりなのに〃 痛い痛い *と言いながら弟のアソコが見る見る大きくなって行く

暖かい どの位続いたろうか・・・。 ものがまとわりついた。 息遣いの荒くなった弟は″ ピクッ "と震えると、 私の脚の裏に生

処女だった私の初めての瞬間。 弟とはいえ、男の 人の イク瞬間を足で感じてしまっ

とんでもない興奮と後悔の間で私は揺れていた。

きっとやめられないよ。克実・・・ゴメンパ

自分。 る手。 男の急所。 相手は弟だというのに。 色っぽく、 あああ、なんて痛そうなんだろう。苦痛に耐えようとする顔。 なまめかしい仕草。 頭おっかしいよ! 狂ってるよ! 男にしかできない仕草。何処までもいやらしくなっていく でも・・・。 股間を押さえる震え

が溶けるように気持ち良かった。・・・克っチャン・・ごめん・・・。 な音を聞きながら、快感で声が出そうになるのを必死で堪えながら手は止まらない・・・下腹部 何度も何度も何度も、 部屋に戻った私は夜食用に作っておいた茹で卵を自分のパンティーの中に入れ、股間にあてた。 さっきまでの光景を反芻しながら下着の上から卵を指で動かした。 エッチ

奈津実?あの ・・・ブーツ履いてこない?明日」

さとしからのTELだった。

「いいのかな? 破壊力抜群よ!」

「あのー・・とにかく・・・黒の奴がいいな・・」

- 15 -

この暑い季節にブーツでもないだろうに。

独特の緊張感があるの。 に聞くコツコツと響く乾いた音が心地良かった。超ミニの日って男の人の視線を感じちゃうから、 苦笑しながらも、私はお気に入りの白ブラウスに黒の超ミニを履いてブーツで出かけた。

いつものコンビニで、さとしの大好きなビールをいっぱい買い込んで部屋に向かった。

ドアを開けると彼は私の全身に目をやり、 だらしない笑顔で出迎えた。

エッチな目で見たでしょ

ドアを閉めるなり私は彼のジーンズの右曲りのモッコリを蹴り上げた。さすがに重たいブー ッは

遠心力がついて、 ものすごい破壊力だ。

「うつ!!」

一撃でさとしは私の足元にかがみ込んだ。左手で急所を押さえながら右手で私の太股にしがみ

必死で痛みに耐え、 歯を食いしばりながら、 私を見上げる顔がたまらなくカワイイ。

「手どかして」

さとしの手を振り払うと、 もう一発蹴りを叩き込んだ。

「ぐはっ!!!」

耐え切れなかった見たい。 今度は両手で急所を押さえてドアに寄り掛かるように倒れ込んだ。

「ビール買ってきたよ!」

何事もなかった様に、私はニッコリ笑うと冷蔵庫にビールをしまった。

我慢できないのよね でどうしてそんなに痛がるの? 私は煙草に火をつけながら、 よっぽどダメージが抜けないらしく、振り返えると、まだ股間を押さえて這いつくばっている。 さとしの悶絶を舐めるように見ていた。うふふふっ。たった2発 ・大袈裟じゃない? でも仕方ないか! オトコだもんね。

早くこっちおいでよ~」 「そんなにパツパツのジーンズ履いてるから、アソコ締め付けちゃって、余計に痛いんじゃない

やっと立ち上がった彼は下腹を拳でトントン叩きながら。 ピョンピョン "と跳ねた。 この仕草

ズじゃさぞかし痛かっただろう。 私は煙草を消すと、さとしのリーバイスのボタンを外してあげた。こんなにキツキツのジー セクシーで。 でも実は私、 右曲りのモッコリくんジーンズ、好きなんだけど

今日はすでにジーンズの下は水着だった。

「あー! かわいい!」

新しいライトブルーのハイレグのビキニだ。

「買ったの?」

「うん・・」

照れくさそうにさとしは笑った。

「じゃ、私もリクエストしていい?」

私はバッグからストッキングを2本出した。

「???ちょっと・・奈津実!」

さすがの彼もひるんだみたい。私はかまわず新しい水着の股間を強く蹴りつけ、 彼の動きを止

ようなかっこうになった。 めると、右足首と右手首、 左足首と左手首をきつく縛った。 手首と足首を縛られて、 膝を抱える

彼ったら、 股間の痛みで歯を食いしばってるくせに、 目線はちゃんと私のスカー トの中を追っ

てる・・。そんなさとしに男を感じちゃうの。

「ねぇ! 私のスカートより・・・あなたの急所、丸見えなんだけど! いかなぁ!」

彼はとっさに脚を閉じたが、 膝が胸に引き付けられてるから、閉じても股の間から大事な所が

モッコリと形を出している。

「じゃ、さとしのリクエストにお答えしまーす。」

私は再びブーツを履くと、 平気で土足のままさとしに近寄り、大きく後ろに反動をつけ、

た爪先で蹴りつけた。プリッとゴムのような反動が脚に帰ってきた。

「ぎゃっ! 待って! 奈津実!」

彼は縛られたまま部屋を転げ回った。

「かわいそうに・・・痛い所押さえたいんでしょう!?」

「あああっ・・・お願い・・・」

「私が押さえてあげる」

はあはあ・・と肩で息をしながら額には脂汗がにじんでいる。

「どこが、痛いのかな! さとし君!」

意地悪に私は聞いてみる。

「キ・・金・・玉からお腹にかけて・ ・・痛みがあがってくるんだ」

・きんたま・金玉・キンタマ・

一度も口にできなかった言葉

股間とか急所とは言えても、 女の私にはずっと言えないでいた言葉。

「・・・・キ・ン・タ・マ」

ゆつくり私は口を動かした。

悶絶するさとしの大事なキンタマを私は、 そっと包むように押さえてあげた。

左手でおへその下にかけて、 優しくさすってあげていると、だんだん膝が開いてくる。

「少し楽になった?」

「うん」

「そう」

膝を落とし、 ニッコリ笑って、顔を近づけ、キスをする・ そのまま体重を預けた。 その瞬間に、 油断しきった「金玉」に私は

「あっあっ奈津実!」

苦痛の極限の顔で私を見るさとしの目は涙で潤んでいる。

「お願い!!!! 降りて! 降りてください・・潰れちゃう!」

私は更に体重をかけた。 床と私の膝の間にコリコリとした感触がある。 私は膝を左右に動かし

「奈津実!!! 降りて! 本当に、 つ・・ 潰れちゃう!」

私は立ち上がりざまに、もう一撃、金玉をブーツのかかとで蹴上げ、 冷蔵庫から冷えたビール

を取り出した。

何処まで残虐なんだろう・

きっと今までで一番痛かったよね。 今日は手加減していない £ 0 うふふふふっ ! ス テ

すすり泣く様なうめき声を出しながら、 さとしはもがいている。

のよね。 そんな立派な体してて、 私の体重も支えられないの? キンタマって弱い のね。 だから急所な

悶絶する姿に″ 私はビー ルを開け、 乾いた喉に流し込んだ。そして2本目の煙草に火をつけた。 ***を感じながら。**

急所の激痛に

男らしさ』と『憧れ

「どんな風に痛いの?」

煙草の煙をふーっと吐きながら私。

「金玉から下腹にかけて・・・焼き付くみたいに・

焼き付くみたいに?!!

あああ、すごい!

「どんな気持ち?」

「恥ずかしくて、 奈津実に・ ・・犯されてるみたいな・・・」

しい格好。 あんなに強いくせに、

確かに今私は彼を犯している。

後ろから、

前から、

急所を打たれて悶絶する、

男の一番恥ずか

あの痛みだけは隠せない。

正直な手が股間を押さえようともがく。

「奈津実、 「キンタマを手で押さえたいんでしょ」 ほどいて、 ほどいて下さい」

ああ・・・押さえたい」

「そうじゃないけど・・」

「押さえると楽になる?」

「押さえてあげよっか」

煙草を消すと私はビールを一息に飲み干してさとしに近づい

そして水着の上から大事な膨らみにそっとキスをした。 縛られたまま動けないさとしの股を思いっきり開かせて、

股間の膨らみをそっと手で覆った。

じーっと痛みに耐える彼の表情。ステキ。とろけそう。

「初めてって何時だったの?」

「小学校の頃、好きだった子に蹴られた・・・恥ずかしくって・・それから俺、 ズーッと今日み

たいなコト ばっかり考えてた。奈津実みたいな女に・・・されたいって」

いろんな懐かしい光景が心に浮かんでは消えたの。

私に蹴られたケン君も、弟の克実も、 さとしみたいに、 なっちゃたのかなぁ。

つかきっと地獄に落ちるんだ。私。 そう思うと妙な快感が胸を締め付けた。

私は指先に徐々に力を入れはじめた。

さとしの眉間にしわが寄って、 歯を食いしばるのが分かる。

もっと力を入れた。次の瞬間 コリッ』と、くねるように指の中で二つのタマが転がった。

やめて!! 奈津・・・だめええええ!!J

子宮がキューンと縮こまるような快感が走り、恥かしいほど、 私は濡れていた。

私はさとしの髪をわしづかみにして、突き飛ばす。

全く抵抗できないままゴロン! とさとしは倒れ込んだ。

激痛に耐えているのだろう。

張り付いた、 私に背を向けて、横向きのままピッタリと脚を閉じて男の痛みに必死に耐えているのがわかる。 真新しい光沢のあるライトブルーの水着の下で、 かたちの良いお尻の筋肉が時折

ピクッと動く。

・子宮を刺激する光景・・・。

彼の顔に自分の濡れた股間を押し付けるようにして座った。 我慢できなくなった私は彼の顔をまたぎ、 スカートをたくし上げると、 パンツをはいたままで

彼の苦しそうなうめき声が股間から子宮に響いてはじける。

不思議・・・そんなに痛がっているのに、 水着がはちきれそうなほど、 ペニスは大きくなって

るなんて! どうして!?

の度にビン!と体が大きく跳ねた。あああ、すてき。 い彼の股間めがけて何度も何度も振り下ろした。パクンッ! 愛しさとエクスタシーの頂点を感じながら、私は手刀を思い切り振り上げると、身動きできな パクンツ!! と鈍い音がしてそ

おもらしをした。 何回叩いただろうか・・・。潰れたら男の人ってどうなっちゃうんだろう・・。 水着の中で膨らんだペニスがビクン! ビクン! と動いて、 さとしは水着の中でオトコの そう思った瞬

強い男の人を、こんなにまで弱くさせてしまう

小さな小さな アソコが好き。

- 24 -

私みたいな女の一撃で、男のくせに

なすすべも無く、 悶絶するしかないなんて。

あの震える姿が

なおさら男の人を、愛しくさせる。

の明かりが灯り始めた。遠くの踏み切りを電車が轢いて走る音がかすかに聞こえた気がした。

「さとしもビール呑まない? 飲ませてあげる」

7

高校を卒業し、 弟に別れを告げ(?)私は大学に通うため、 上京した。

初めての一人暮し。心細くもあったけれど、自由と期待でいっぱいだった。

なんと言っても、その店のユニフォームがかわいくって気に入ったの。 5月に入ると、大学の近くのカフェでバイトを始めることにした。接客は嫌いじゃなかったし、 白地にトリコロールカラ

の衿のブラウス、黒いタイトのミニスカートがカッコ良かった。

店長を始め、フリーターや同じ大学の先輩や、お客さんまで、 みんな優しくしてくれた。忙し

い けど結構楽しかった。

ひと月ほどたった頃、みんなで私の歓迎会を開いてくれた。

せっかくの飲み会だから、気合を入れて一番お気に入りの白のミニスカー トで出かけた。ライ

ンが気になるから、 ちゃんとTバックはいて・・・。

軒目に入ると、 みんなだいぶ酔っ払ってい た。 ベテランの谷口さんが私のとなりにピッタリ

寄り添ってきた。

「ねえ! 奈津実ちゃんって彼氏いるの?」

「さーあ、どうでしょう??」

「こんなに可愛くって、居ない訳ないよね?」

「まあ! お上手ぅー!」

気がつくと、 みんな2人~3人位づつで話に熱が入っている。 落ちてしまって眠っている人も

居た。

「奈津実ちゃんの趣味ってなに?」

「う~ん・・・何でしょう?!」

・・可愛い顔して、 意地悪なんだから・

笑いながら私。舌を出してウインクして見せた。

「う~ん・・・意地悪かもしれない、私。 今日は谷口さんの事 イジメちゃおうかなぁ!」

「奈津実ちゃんなら俺、イジメられてみたいな!」

本当? 強いわよ~私! 後悔しますよ~!」

ねえねえ! どんな風にイジメるの?」

谷口さんは私の肩にもたれるように座り直した。

知ってたんだ。 初めてのバ イトの日から谷口さんが私の脚やパンプスを舐めるように見

「どんな風がいいかなぁー。谷口さんはどんな風がいいんですか?」

「もう相手が奈津実ちゃんだったら、なにされてもイイよ!」

「またまた!彼女に殺されちゃうもの・・やめときまーす!」

彼は誰も見ていないのを素早く確認すると、私の太ももを軽く指で愛撫した。 ストッキング越

しに「ゾクっ」と快感が私を襲った。

いっぷっ

「だめです! そんなこと言って!!」

でも、ほんとは凄くうれしかった。

午前1時を回っていた。

潰れた数人を残してとりあえず解散になった。

「送ってくよ」

谷口さんとタクシーに乗り込んだ。

ネオンが眩しい・・・眠らない街、寄り添う恋人達・・

「来るか?」

「″来いよ″って言ってくれないんですか?」

「・・・来いよ・・・」

私は黙って頷き、彼の肩に寄り添った。

細く見えていたけど、実際にもたれかかると、 がっしりした男の強さを感じさせる。

胸がドキドキした。

タクシーの中で何度も、何度もキスをした。

そして・・・彼の部屋・・・・・・来てしまった。

「イジメてみてよ!」

「だめですよ!まだ言ってるぅ!」

「どんな風にイジメるのかな?奈津実ちゃんは?」

今日は素直に・・抱かれたくて、ついて来たのに・・・。

弟と別れて、自分の中では、やり直そうと思っていたのに・・。

ねえねえ! 奈津実女王様!」

「あんまり意地悪言うと本当に大事なトコロ蹴っちゃいますよ!」

「おっ! 恐いねー! その細い脚で? そんな事言ってると、俺がいじめちゃうぞ!」

「もう! 本当に強いんだから!!」

その時、彼の部屋の電話が鳴った。

彼は私に背を向けて電話を取った。

「うん・・・いや・あ、ゴメン電源切ってたかも・・・うん

女の人・・。

いや、『彼女』からの電話に間違いなかった。

ケータイを切っててくれたのはちょっと嬉しかったけど。

彼は振り返り、 人差し指を口にあてて″ ししっ *のポーズで、私を困った顔で見ている。 話振

るのが分る。 りから、どうやら、 うちのカフェの 「誰かさん」 に間違いなさそうだ。 ここに来たいと言ってい

「うん・・・そうだけど・・・明日にしようよ」

なかなか電話切れないのね。切らせてあげようか。

本当の・・・私が・・・目を覚ます。

私に背を向けて、 前かがみになってる彼に近づいた。 半開きの脚。 男の一番弱い格好で立って

いる。

私は後ろから股間をすくい 上げるように軽く蹴り上げた。 足の甲がスポンっと急所に入っ

「うっ!」

電流が走ったように、ピー ンと背が伸びて、 つま先立ちになったかと思うと、受話器を握った

まま彼はしゃがみこんだ。

「ううん・・・・・いや・・・本が落ちそうになって・・・」

なに言ってるの!

痛そうに下腹部を抑えてるくせに!!

彼は私を見上げ、 怒ったような、泣きそうな顔をしながら片手で拝んでいる。

・・・待たないわよ!

先がイイカンジでタマを捉えた。 私はニッコリ笑うともう一発・・さっきよりちょっとだけ強めに、 急所蹴りを見舞った。 つま

「うつ!」

あっ!入っちゃった!!! 軽くのつもりだったのに・・

腹まで突き上げてくるのだろう。声が震えている。 咳込んで・・彼は私に背を向け、急所を抑えたまま崩れ落ちて、 くの字になった。 苦しみがお

「う・・・ううん・・・そうじゃなくって・・いや・・・ちょっと飲みすぎて、気持ち悪くって、

お腹も痛いし・・」

ホットした顔で私を見上げる彼。私は彼に近づき、そっと振るえる腰をさすってあげた。

ねえ! 今夜・・・やり直せるかな・・・ #

自分に問い掛ける。

らないみたい。 いているのと、電話の向こうの彼女とのバランスが上手く取れない彼は、 私はズボンに手をかけ、 ボタンをはずすと、チャックを下ろした。さっきの急所蹴り2発が効 抵抗しようにも力が入

引き締まった黒のビキニが私の目に飛び込んでくる。 アレの カタチがはっきり分かっ

ろう・・ 「え?・ いや・ ・何でもないって。 何言ってるの! よく言うよ!! そ~んなわけないだ

が分かった。 私がこれ以上わがままを言わないと思ったのか、 彼が電話の向こうにバランスを傾け始めたの

・・急にシラケた気持ちになった。

人を誘っておいて・・・電話は切らないんだ・・・ふーー

-イよ! それならそれで。覚悟してね。

私は左手で彼のビキニの上からゆっくりと股間を愛撫し始めた。

「うん・・もう治ってきた・・え? うん・・大丈夫・・ところでさぁ~」 さっきまで縮こまっていた彼のモノが見る見る元気になって行く。

バカ!!!

上手くやってるつもりなんでしょ。

奈津実は都合のいい女だと思ったんでしょ。

女を甘く見るとね・・・。

私は空いてた右手でペニスの付け根から垂れ下がった膨みを、思いっきり握ってやった。

あうーつ!」

さすがに堪えきれずに彼は大声を上げた。

・・・私にイジメて欲しかったんでしょ! タニグチさん!・・・

大変だね。男のヒトって。

一番気持ちいい所と、一番痛い所が一緒に付いてるなんて!!

これじゃ女に勝てるわけ無いよ。

「どうしたの?!」

と電話の向こうの声が、

私にまで聞こえる程大きくなった。

・・・きっと彼女はここへ飛んでくる。

別に、彼女が居たって、かまわない。

横取りしようとも思ってない。

誘ったんなら、ちゃんと抱いて欲しかっただけなのに。

何時までも電話を切らない彼がいやだった。

中途半端なのだめなの、私。

私は立ち上がると、受話器を握り締めたままぐったりしている彼の股間を思いっきり踏みつけ

て体重をかけた。

彼のタマタマに「お休み!」って言いながら・・・。

痛みに耐えかねた彼は悲鳴を上げ、とうとう受話器を手放した。

これは電話の向こうの彼女の分よ!!

パクーン! と乾いた音がしてビセ私は転がった電話を拾い上げると、 彼の大事なタマタマを受話器で殴りつけた。

と乾いた音がしてビキニの中でタマが揺れた。

「ゲホッ!! ゲホッ!!」

彼は海老のように丸くなって咳き込んでいる。

後は宜しく!!!!

私はバッグを抱えて彼の部屋から走り出た。タクシーを拾おうと手を挙げながら、 可笑しくっ

て大声で笑った。そして涙があふれてきて、 街が滲んだ。

カみたい

月がとっても奇麗で、 6月にしては少し肌寒い夜だった。

8

「お盆休み、どうするの? 実家帰る?」

さとしからの電話だ。

「うーん。どうしようか迷ってる。どうせ混むしねー」

「じゃー2泊3日位でどっか旅行しない?近場でもいいし」

「あら、2泊も続いたら耐えられないんじゃない? 本当に大丈夫かしら? 息子さん

談された方が良くってよ!」

すっかり二人の間に定着してしまった。

普通にセックスだけの日もあるけど、急所攻めをした日はお互いに燃え方が違うのが分かる。

後ろから攻めるのが好き。

男の人を犯してる感じがたまらない

前からも、 後ろからも、 あんなに簡単に狙える所にどうして神様は男だけに急所を創ったんだ

ろう・・。

いる。 Hな雑誌の女性のヌ 恍惚とした顔の表情も・・ ード写真の″悩殺ポーズ **"**って、 男の人の〃 悶絶ポーズ "ととっても似て

- 36 -

さとしの車は軽快に高速を滑って行く。

まだ日の昇る前に出発したのだ。 開けっ放した窓から、夜明け前の心地よい風が入り込んで心をくすぐる。都内の渋滞を避けて、

良く、とれたねー。こんな時期に・・・」

「実は・・・前から予約入れてたんだぁー」

「えー!? お見事!!!」

高速を降りて、国道に入る。

「おなかすいたぁー」

「そうだな。 コンビニ捜すか・・ファミレスでもいいし・・マックでもいいよ」

「どうせビールも買うでしょー」

なりと見つけられた。 コンビニを捜して走る時って、 不思議と反対車線にばっかり、 見つかるの に・・・今日はすん

チェックインは3時だからこの調子で行けば、 朝食を見繕う。 氷とビールも、 山ほど買って、 海でゆっくり遊べそうだ。 車に積んできたクーラーボ ックスに入れた。

照りつける太陽。

ビールを飲みながら、お互いにサンオイルを塗りっこした。

私は周りの人にお構い無しに、さとしのビキニの右脇から指を入れ大切なタマタマにもサンオ

イルを塗ってあげた。

私の大胆さに驚くさとし。

私自身・・・・自分の大胆さにあきれた。

私は指先に力を入れて意地悪をした。

「奈津実!・・・奈津実!・・・駄目ってば・・・」

人前だからさすがに大声は出せない。耳元で小声で

と必死の抵抗をする。

「どうかした?」

更に力を入れて、私は右側のタマだけを集中的に虐める。

「・・うつ・・・」

腰がピクリと逃げようとする。

「待ちなよ・・逃げたらホントに力入れるわよ!」

私はサポーターから彼のタマタマを引っ張り出して、 水着との間に収めた。

「ハイ! テルテルさとしくんのできあがり!!」

き出て見える。 タマ袋の根元を左脇からサポーターで押さえつけられて、ビキニの股間はプックリとタマが浮

「セクシーよ~!・・軽~く叩いても痛そうね!ステキ・・」

「奈津実・・・もとに、もどして・・」

「そういう事言ってると、人前で蹴り上げるわよ。いい?」

膨らんだ水着越しに、私は右のタマを集中的に虐め続けた。

「痛ッ!!」

たった3本の女の細い指にさえ、逆らえない・・・男の急所・

必死に股間を手で押さえるのを、こらえて痛みに耐える・・。

「何処まで我慢できるかな?」

「奈津実・・・あっ・・あああっ・・

「うみみみっ!」

パラソルの下で、 ふたり仲良く並んで、 膝を抱えるように、 寄り添いながら・

私は彼の右玉だけを執拗に虐め続ける。

強い陽射しが海に反射してキラキラと輝いた夏・・・。

遠い空。

力強い太陽の光の中にいつも私は哀しさを感じてしまう。

・・・いずれ必ず終わりが来る・・・。

反射する光の中に、そんな予感が、 ひっそりと息を潜めているように思えて切なくなる。

ビールを飲みながら、さとしの正面から、 私は〃 男の膨らみ √を堪能した。

なんてエッチな膨らみだろう。

蹴り上げられて、 砂まみれになってもがき苦しむ、 あの姿を想像すると濡れてしまう・

旅館にチェックインすると、すぐにHをした。

ふたりとも、もう一秒も我慢できなかった。

私にイジメられた日の、さとしの日はとっても激しい。

今度は・・・私が何の抵抗も出来ずに罰を受ける番だ。

度も何度も・・畳の上で犯された。 下着を脱がしてもらえないまま、 無理矢理、下着の脇から、 私の急所にさとしが入って来て何

ふたりのからだの、潮と汗の臭いがすごく官能的で。遠く聞こえる波の音と、自分の体の区別さえつかなくなる。

窓にもたれて、さとしは煙草を吸っている。

私はバラバラになった自分を、ゆっくり拾い集める・・。

本当はすごく臆病で不器用な私を、さとしは知ってる。

「お風呂行こっか!」

いいよ

「混浴じゃないんだよね・・」

「困るの、さとしでしょーが!」

「そうか・・」

「バスタブに気を付けてね!」

浴衣に着替えて、帯を巻きながら、ふと・・部屋の鴨居に目が行った。

!!!

うふふっ・・・楽しい夜になりそうだわ・・・。

9

大浴場へ入り、大きな鏡の前で浴衣を解く。

水着のあとが真っ白に残っている………。

っている。 左の頬、 さっきまでの、さとしの余韻が身体に残ったままボーっと、大きな鏡の前に立った。 左の胸、右太股の内側………、 さとしが「可愛い」と何時も言ってくれるホクロが映

何かの本で読んだことがある。 中世の頃、 ホクロの多い女性が沢山″魔女 "として裁判にかけられ焼き殺された………と

ねえ、奈津実………、あなたは魔女なの?。

鏡の中の私は何も答えずに首をかしげて、こっちを見ているだけ。

ゆっくりと湯船につかる・・焼けた肌がヒリヒリして痛い。

大きく開け放たれた海の見える窓から、夏の夕方の風が心地よく大浴場に入りこんできた。

お風呂をもらってから、夕食までの半端な時間が、 改めて旅館に泊まることを実感させる。

館内放送が入ると、早めの夕食を済ませた。

部屋に戻るとすでに布団が敷いてある。

「おー!」

「おー!!」

しばらく二人で布団の上でゴロゴロした。

「ねぇ……奈津実……」

「リクエスト……する?」

「うん……」

私はタオルでさとしに目隠しをした。

浴衣を脱がせ、下着も脱がせた。

「奈津実………恥ずかしいよォ………」

私は何も答えずに、バッグから自分の水着用のアンダーショーツを取り出して、 さとしに穿か

せた。

小さなTバックが、さとしの筋肉質なお尻にくい込む。

まショーツがくい込むようにさとしの腰骨に張り付いた。 女性用の前の小さな三角の布に、さとしのアソコが収まるはずもない。 左のタマがはみ出たま

った。 なり、 !

しゃがんでみてよ」

- 44 -

- 43 -

目隠しされたまま、さとしは私の言いなりになるさとしの股間を舐めるように私は見つめた。

四つんばいになってごらん」

「四つんばい?」

「ノロノロしてると蹴り上げるよ!!」

「はい……」

さとしの四つんばいを後ろから眺めながら…… …私は煙草に火をつけた。

「ねえ! オナニーしてよ!」

「奈津実………それは………」

「いやなの?!!」

······

さとしは自分の手をショーツの中に入れ、ペニスをしごき始めた。

「気持ちいい?」

「恥ずかしい………」

さとしの息が荒くなり始めた瞬間、 私は、 はみ出た左のタマめがけてつま先で蹴りを入れた。

「あうっ!!!」

「だーめっ!いかせないよ………」

さとしは股間を押さえて倒れ、転げまわった。

「何よ! そのだらしない格好は?! 立ちなさい!」

下腹部をトントン叩きながら必死に立ち上がるさとし。

その両手を、私は自分の帯を解いてきつく結んだ。

「ああああ 奈津実………」

さとしの両手を結んだ帯を私は鴨居に結びつけた。

万歳をした格好で、目隠しされたまま、さとしは鴨居に吊るされた格好になった。

「奈津実……やめて……」

「ほら!」

座卓をたぐり寄せ、左右の脚にさとしの両足を縛り付ける。

股を開いた格好で、完全にさとしは貼り付けになった。

怖い?一

......怖い」

さとしの股間に食い込んだ私のべ ージュのアンダーショー ツからはみ出た左のタマに私はそっ

と口付けた。

昼間、海岸では、右ばかり虐めたから………今夜は左………。

目の前の左タマをピン!と指ではじいた。

「あっ!」

タマがプルンっと揺れて、さとしは声を出して悶えた。

目隠しされてるから、構える事も、腰を引くこともできない。

哀れで、かわいい。

「なによ! 痛い分けないじゃない! こんなので」

もう一度、今度は2本の指で勢いよくはじいた。

あああっ!」

鴨居に吊るされたまま……さとしは腰をよじって痛みに耐えている。

「ねえ! もっといいことしてあげよっか!」

私は床の間においてあった肩たたきを手にとった。

竹でできている柄の部分をさとしの左のタマタマめがけて振り下ろした。

コン! と風を切る音がして、パクン!と左の金玉に当たった。

「あああああっ!!!!」

さとしは腰をくねらせ、悶絶する。

「ちょっとは我慢しなよ!まだ力入れてないんだから」

「待って!!! お願い!! 待って奈津実!!」

私は後ろに回り、お尻の間から垂れ下がって見える、 左のタマを肩たたきで突き上げた。

「あうつ!!」

ビン!と鴨居にかかった帯が張り詰めた。

そろそろ自力で立っていられないのかも知れない。

どうして、金玉ってそんなに痛い の……片方だけなら半分の痛みじゃない 0)

しょうがないなぁ……。

はみ出た左の金玉にキスする。 キュっと吸い付くと苦しげに 「あああ………」と声が漏れる。

痛みが残っていて、辛いのね

……ステキよ。

耐えなさい。耐えられないその痛みに………。

私はしばらく、左のタマを口にほおばり、舌で弄んだ。

「奈津実………、ほどいて……ください」

私は無言で、 髪を結わえていたゴムをはずし、さとしの左タマの根元を結わえた。

ああああ! やめて! 奈津実!」

「海の音聞こえる?」

「奈津実!!!」

「月が綺麗なの」

「奈津実!!」

能した。 開け放した窓から入り込む潮騒の音を聞きながら鴨居に吊り下げられた。男の痛み』を私は堪

「好きなの………」

思いっきり力を込めて、目の前の左タマを執拗にひねり上げる。

さとしは跳ねるように躰をくねらせ、悶え、苦しむ。

「好きなの……ねえ! 聞いてる?」

私は更に力を込めた。

「奈津実! お願い……やめて……」

とうとう耐え切れずに鴨居から帯がはずれ、二人とも座卓ごとドスン! と倒れこんだ。

背中から、お尻。さとしの筋肉質な躰に私は丁寧にキスをした。

ぐったりして動けないさとしを仰向けにして、 今度は腰骨にキスをする。

「だめじゃない! 私のショーツ汚して!」

た。 目隠しされた男が……私のショ ーツをはいて、 股間を濡らしている。 何もかもがステキだっ

私はさとしの上に馬乗りになった。

したたるほど濡れた私の急所に、さとしのペニスをあてがい、 なった、さとしが私の奥まで入り込んだ。 腰を沈めると、 ぬるん! と熱く

頭の芯まで電気が流れて………

気が遠くなってく……

私はただ……

さとしの左タマを……夢中で握りながら……

腰を激しく動かし続けた。

悲鳴に近いさとしの声が、遠のいていく。

何度も、何度も私の中で波が押し寄せては、干いていく。

それは眩暈にも似た快感………

昇りつめた私は、信じられない程の力で、

さとしの急所を握り締めていた。

急に"クチュン』と指先に変な感触がして……

いやな……感触がして……

私の中でさとしのペニスがビクン! ビクン! って動いた。

口からよだれを垂らして、さとしは失神した。

やっちゃった・・

大きな月が静かに海を照らす。

熱い涙が私の頬をつたって、さとしの胸にポタポタ音を立てて落ちた。

「愛してるの・・・

「ずっと、こうしてたいの・・・

奈津実